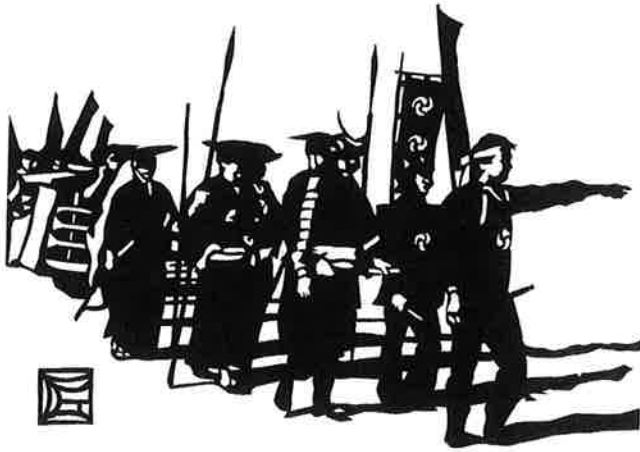


日豊ロマン

さとうたくみ



昨年十一月十三日、第二回目の「日豊ロマン」が実施された。

これは、日豊経済圏構想による「日豊サミット」に向けて、延岡・佐伯間をのろしで繋ごうという試みで、御手洗一而氏の著作「巴の鏡」にヒントを得た清松幸生氏の発案だった。

この地方にのろしが置かれたのは古代に遡り、九州を統轄する太宰府を中心にした交通路（駅馬・伝馬制）が完成し、国防のための緊急通信として烽（とぶひ）が置かれた。豊後風土記には「大野郡駅二所・烽一所、海部郡駅一所・烽二所」とある。また大陸の脅威に備え築かれた北九州・瀬戸内海沿岸の水城・山城には防人（さきもり）が置かれ、のろしが設けられていた。

このような防備の城と通信手段であるのろし台の役割は、中世武士団の闘争の中に引き継がれ展開された。これは領内の主城を中心にした防備線上に支城を設け、のろし台を配して敵の侵入に備えたものである。

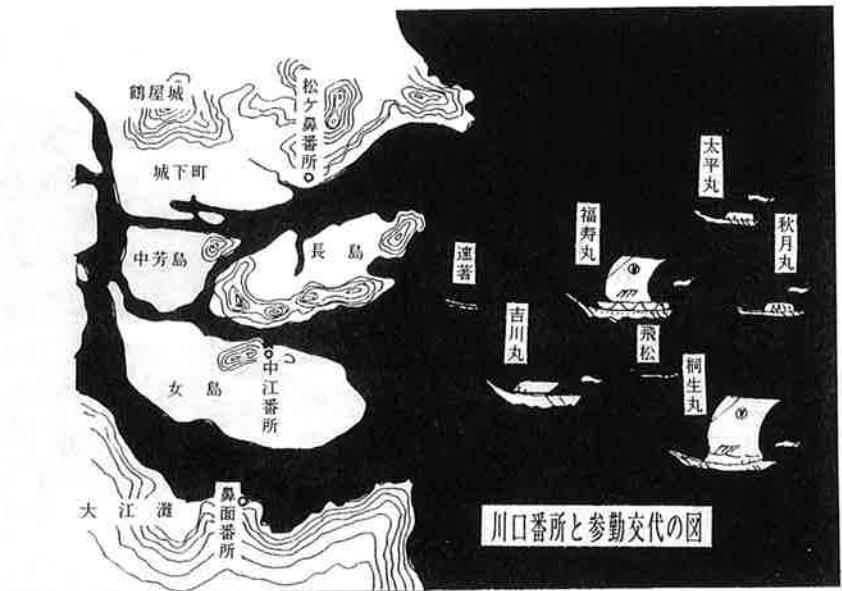
今回の時代設定は中世佐伯氏の頃であるが、当時の確実な資料はない。しかし今も昔も地形が変わらない以上人の考えに大差はない筈である。幸い、江戸時代の海上

番所の所在が明らかなので、これらを頼りに現地を確認して、できるだけ史実に近い場所を設定することにした。先ず佐伯城下へ入る河口付近には、船の出入りを見張る三つの番所が置かれていた。

一、松ヶ鼻番所 蟹田の裏山で藩主の別荘松閑のあった付近で、中川・臼坪川を見張る。

二、中江番所 女島沖吉神社の付近で谷川家が役宅跡ではないだろうか。神社の敷地は谷川家の寄進と伝え、山頂にはのろし台の穴らしきものあり。あるいは大戦中の遺物かもしれない。幕末に台場（砲台が沖ノ州に築かれ、異国船防備に村々の獵師が徴用されている。

一、鼻面番所 番匠川の河口灘の先にある。灘の渡しを利用して浦辺の人々は、雨の日でも番所前に土下座して「何村の何の何某」と身元改めを受けた。吹浦の浦方奉行小寺家には「唐傘上げてチョッキリ御免」の言い伝えが残っている。



○佐伯領番所（温故知新録）

正徳六年正月の調べに係る領内の番所は左のごとし

一、番所四ヶ所、蒲江浦、小浦、大島浦、保戸島浦、

以上は兼ねて仰せ出されたる通り、旅船入念相改め

公儀ご城米船渡海のみぎりは、城下へ注進仕り、風

雨の節もし破船これ有りそうらへば助け船差し出し

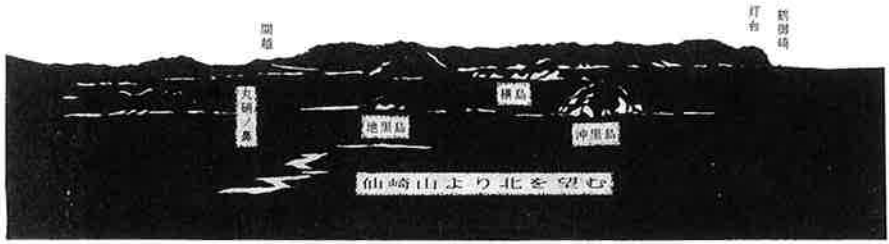
上荷物相改め、万一異国船等相見え候節は早速注進

仕り候様申し付け置き、右四ヶ所には高札を立つ。

以上は高札場のある押えの番所で、のろし台を置いた物見あるいは遠見番所の位置・箇所とは必ずしも一致しないとされる。

我々が最初に訪れたのは蒲江町の仙崎公園で、西野浦の磯貝義彦氏の案内によって、戦時中の砲台跡と山頂近くにある石積の炉らしき痕跡を確認することができた。あいにくの雨に遠望を阻まれたが、古近を問わず海防の





役割を担った要崖に立って、感慨深いものがあつた。番所の役宅は原田家と言ひ州ノ本にある。今は無住となつて現存している。

この仙崎から北を見渡せば黒島・横島の向こうに長蛇の鶴見半島が、手前は入津湾尾浦の山越しに米水津小浦の遠見山（鶴見町日野浦ではトサカ城と呼ぶ）が見える先頃のろし台の跡が確認されたそうで、役宅の跡はムスコヤと呼ばれている。

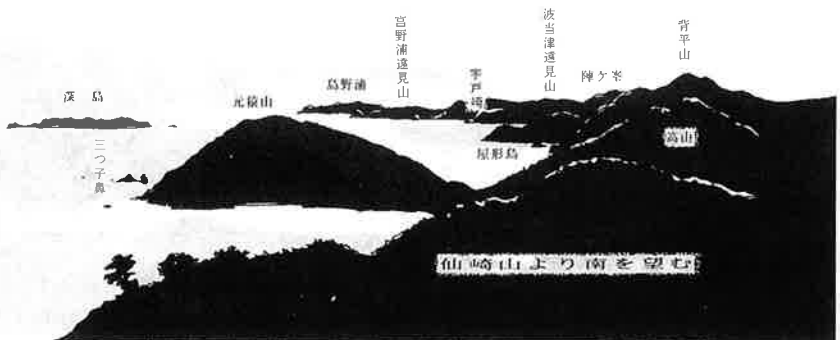
南は左手に深島を望み手前に元猿山、右は高山越しに蒲江の背平山、のろしはこの山を中継して波当津の遠見山へ向かう。天気の良い日は延岡領宮野浦の遠見山や島野浦が一望にできる。

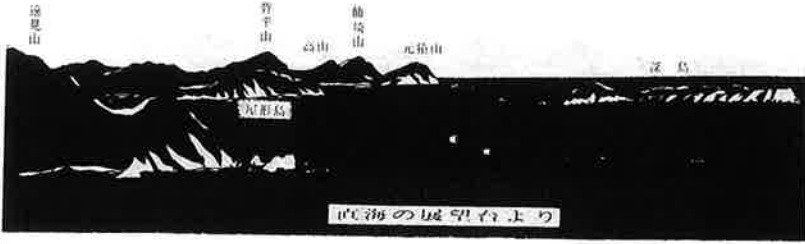
『延陵日記』によると延岡側の配置は次の通りである。

一、海上遠見番同浦留番六ヶ所

一ヶ所延岡津口、東海（とおみ）山上山下一ヶ所、細嶋同一ヶ所、宮野浦一ヶ所、尾末津口草地一ヶ所、下別府津口番一ヶ所、土々呂番所

次に、境目拾巻ヶ所とあつて、その内



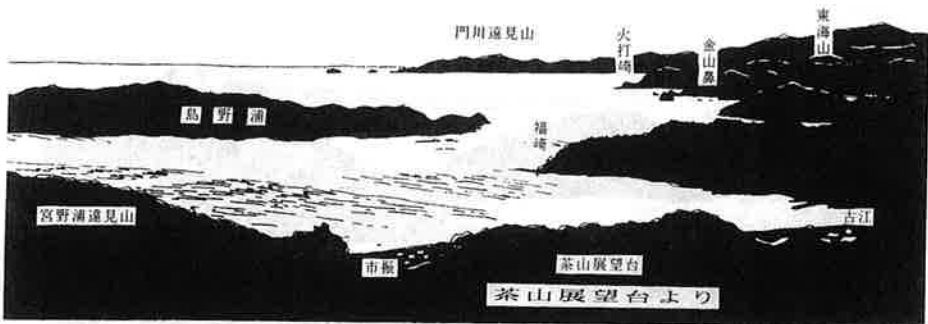


「一ヶ所曰杵郡宮野浦豊後境津口毛利周防守様領地」とあって、海上の境界は現在の県境宇戸崎より南であった。このことは、清田義雄先生所蔵の領内地図によっても明らかである。

後日、我々は波当津の遠見山を過ぎて北浦の海岸線を走った。芒洋たる海原を眼下に見降ろす所々の展望は絶景である。特に古江の茶山展望台、あるいは鏡山から島野浦を望む景観は、わが佐伯の彦岳から佐伯湾を望むに似ている。

茶山展望台をさらに北に登り詰めると「佐伯惟治終焉の地」陣ヶ峯に達する。ちょうど波当津の遠見山が真下に見え、蒲江の背平山、仙崎は一直線である。寒空の下「惟治主従はここで吉報を待っていたのか」、東に大海原、西に重々たる山海を見ながら「孤立した惟治の胸中」を察することができる。惟治を祭る尾高智神社へ下る道は途中にあり、鳥居と道標が立っている。

晩秋の頃は格別、影絵のように浮かぶ島々岬を眼下にしながら、夕日と紅葉に染まる山の端を別けて頂に向かえば、神々しくも極楽浄土へ昇る心地であった。



豊後佐伯氏と日向土持氏

両者には面白い共通点がある。どちらも平安時代の宇佐八幡宮荘園から起こった土着の支配者で、家紋に「左つ巴」方や「頭左三つ巴」の神紋を用いている。

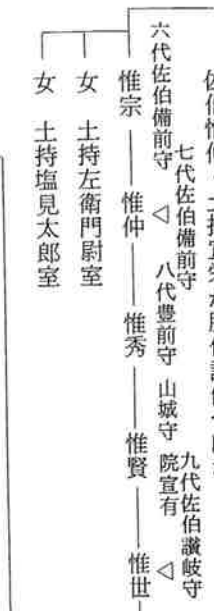
鎌倉時代以降は豊後大友氏、日向伊東氏などの鎌倉御家人の downward によって、次第にその領域を狭められ、戦国時代の終焉とともに、その支配地から姿を消してしまっただのである。

当時の佐伯氏と土持氏の苦悩は、現在の県南佐伯と県北延岡の境遇に遠からず、「日豊サミット」ならぬ両家の縁組によって盟約を結んでいた。その関係を佐伯氏系図に求めれば下記のごとくである。

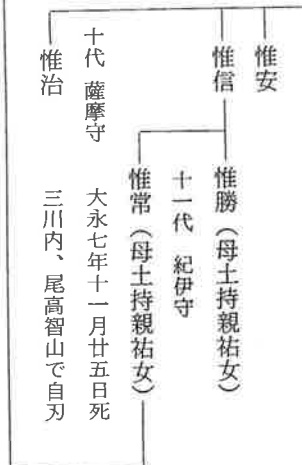
今回はのろし通信に縁組を加えて、史実を再現するイベントとなった。メイン会場の弥生町総合グラウンドから第一煙を発し、梅牟礼山頂・城山・大入島、ここから先の海岸線を通し、土持氏の居城だった松尾山に達すると待機していた姫君が佐伯へ向かって出発する。のろしは折返し梅牟礼に返って、姫の到来を告げるわけである。

★南北朝の動乱（建武二年～延元四年） 1335～1339

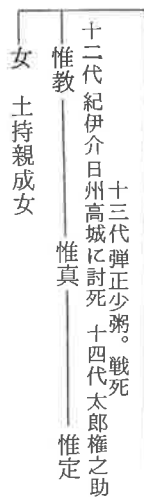
佐伯惟仲・土持宣榮が肝付討伐へ向かう。



★梅牟礼合戦

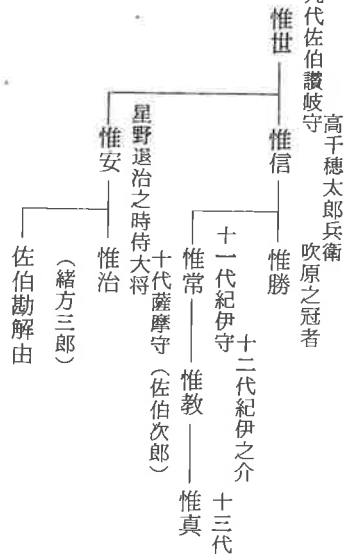


★日向耳川の合戦



天正六年（1578）四月、土持親成は大友勢の進攻に破れ同十一月、佐伯惟教・惟真父子は高城に戦死した。

一昨年は、佐伯勘解由を尋ねて八代郡の葭岡境氏が来られたが、前号に発表された多田太郎吉氏の「八代郡の佐伯氏」は興味深かった。その説を图示すると



右のようになり、明解な説だと思ふ。

今回は延岡在住の山口考司氏より「惟治末孫」の名乗りがあり、当家の江戸末期の墓碑に関する資料が送られてきた。代々名前に「惟」の通字を用い、先祖供養の為尾高智神社に参っているそうである。

『延陵旧記』によると

白杵郡之内岡富組 (旧岡富庄)

一 岡富村 大庄屋 山口弥惣左衛門

とあって、古くからこの地に基盤を築いていたと思われ、

山口考司家は大庄屋の分家筋にあたる。山口家の出自を語る碑文には、次のように刻まれている。

大祖の諱は惟由、通称作右衛門。その先の出自は、姥岳大神氏。故有りて山口と為る。家うり此土に干ぐ。後、遂に岡富二千石を轄つかさどつて郡吏と為る。焉こに交葉歴々、孫子繁榮して当落は家の肇め也。距へだたる此歳、嘉永壬子まで二百年ここに干ぐ。その九世孫惟道、その本支ぶんらん紊乱を恐れ、老年なん巨ぞ知る也。徴誌を以て盤石を設け、余々に曰く。別系傍統ますます多くなります乱れ、その乱れは時の盛衰に因るとも、典家の榮枯は勢い自ずから然らしむる也。

余故に誌を以て、その系の一斑を挙げ、その本支、左を干ぐと云う。

嘉永五年歳壬子六月二十三日 児玉徳撰併書

ちなみに、山口考司家の家紋は「並び矢」と言う。

佐伯地方の山口姓は惟治の書状の中に見える。

はたつとせまぐらうえものじょうちゆうま
畑津井山口右衛門尉持車、塩月紀伊介持にまかせ、

もくもちたらつかわすべくそうろう
木工持多々良可 遺之候、恐々謹言

三月四日 餅原監物允殿 惟治(花押)

また、耳川合戦の戦死者の中に山口右馬之助、同源右衛門の名が見える。

現在、延岡には山口姓が二百軒以上あって氾濫しているが、佐伯地方には案外少なく、堅田川上流の山口川に山口地区があり、隣接する谷川地区に山口姓が十軒程ある。同じく黒沢川上流の富尾神社のある船形地区に四軒あって、惟治との関わりを強く感じさせる。

と言うのも、惟治の書状が鍛冶・精練に関わるものでそれに携わった人物名が挙げられていること。多田太郎吉氏の発表にあるように、惟治の鉢山開発が黒沢方面に向けられていたらしいこと。惟治の日向落ちの経路にあたること等である。

以上、勝手な推察をしてみたが、延岡の山口姓については既に軸丸勇氏の研究があり、惟治父子一行の末路が死をもって単純に割り切れない。そんな伝承が宇目地域に残っているようで、「異説榎牟礼実録」の世界があるようである。

最後に「日豊ロマン」を成功させたグループを紹介して締めくくりにしたい。

- ① 弥生町総合運動公園……NTT佐伯
- ② 榎牟礼城址……古市区有志
- ③ 城山(八幡山)……サークル展望台
- ④ 石間(大入島)……大入島有志
- ⑤ 有明浦(林道)……きよきよ連
- ⑥ 鶴御崎灯台……音楽ROOP音鬼痴
- ⑦ 宮野浦林道……リバイバル16
- ⑧ 仙崎公園……西野浦の明日を考える会
- ⑨ 背平山……泊友会
- ⑩ 茶山展望台……ほえよう会
- ⑪ 鏡山……SOS、SSC
- ⑫ 愛宕山……延岡ローターアクト
- ⑬ 松尾城址……NTT延岡